

令和7年度 稲美北中学校 3年生の学力調査結果

＜学習成果と課題＞

国語

○成果があった点 ●課題がある点

正答率の分布から物語の登場人物の心情や内容を理解することは出来ている。全国的に、どの生徒も自分の考えを表現することが苦手であると分かるが、特に本校の生徒はその傾向がより顕著に表れている。また、基礎的な漢字の正答率も全国平均よりも大幅に低く、基礎的な学力の不足や学習習慣の欠如がみられる。以上のことから、学習習慣を身に付け、自分の考えを正しい言葉で表現する力を伸ばすことが必要である。

言葉の特徴や使い方に関する事項

週に一度、授業内で漢字テストを行っており、課題として出された漢字については正しく覚え、書くことができる。しかし、学習が知識として定着しておらず、小学校レベルの漢字であっても書くことが出来ないものが多い。また、語彙が少ないことから、自分の考えを整理し、言葉で表現することに特に苦手としている。

これまで授業の中で取り組んできた自分の考えを書く場面を継続しながら、短い感想や説明を書くことから文章への苦手意識を改善し、自分の思いを表現できる力を伸ばしたい。また、書く作業の中で、日常的な漢字を使う場面を増やすことで、基礎的な知識の定着を図りたい。

- 基本的な漢字・言葉の知識
- 考えを言葉で表現する力

話すこと・聞くこと

資料や機器を用いて、自分の考えが分かりやすく伝わるように工夫する力は、今後さらに伸ばしていくべき課題である。授業の中で、ICTを活用し、プレゼンテーションをする場面を増やすことで、考えを伝える力を磨きたい。また、他者の発表を見る機会を増やすことで、自分の工夫の幅を広げられるようにする。さらに、聞き手の反応を意識し、自分の考えをわかりやすく表現しようとする力を養いたい。

- 自分の考えが分かりやすく伝わるように工夫する力

書くこと・読むこと

記述式の問題において、自分の考えを表現することを最も苦手としている。語彙力を増やし、日常の出来事に対して、自分の考えをまとめる練習を行い、言葉として表現する機会を多く作り、書く力を養っていきたい。

また、読むことについては作者や筆者の文章の意図を読み取る力は身につけているように感じる。様々な文章を読む機会を増やし、より豊かな発想力や物事への視点・捉え方を養いたい。

- 作者・筆者の意図を読み取る力
- 自分の考えを言葉で表現する力
- 自分の考えを持つための発想力や視点

数 学

○成果があった点 ●課題がある点

数学的な知識そのものは概ね定着しており、式やグラフ、数値などの「情報を読み取る力」については、一定の成果が見られる。しかし、一方で読み取った情報をもとに自分の考えを組み立て、数学的な表現を用いて説明する力に課題があることがあきらかになった。今後は知識の定着だけでなく「考えを説明できる数学力」の育成に重点を据え、ペア・グループでの説明活動や式の意味、数値の根拠を言葉で添える習慣を身につけ、説明できる数学の授業に取り組むことが必要である。

数と式

「1は素数に含まれる」という生徒が多かったため、素数を用いる際に、1は素数に含まれないことを再認識する場面を設定する必要がある。また、数学的な表現を用いて説明する問いでは、半数近くの生徒が無回答であったため、文字を用いた式の読み取りや、事柄の特徴を数学的に説明する活動を充実させることが必要である。

○命題や事柄が常に成り立つとは限らないことにおいて、反例をあげることができる。

●素数の意味を理解している。

●式の意味を読み取り、成り立つ事柄を見いだし数学的な表現を用いて説明することができる。

図形

図形をかく活動を通して、図形の定義や性質を理解し、証明されていることを基に、新たに分かる辺や角についての関係を見いだすことができているが、最初から証明する問題に課題がある。今後は、仮定や仮定から導かれる事柄、結論を導くために必要な事柄を明らかにするなどして証明の筋道を立て、それを基に証明できるように指導することが必要である。

○証明を振り返り、証明された事柄を基に、新たに分かる辺や角についての関係を見いだすことができる。

●ある事柄が成り立つことを根拠に基づいて証明することに課題がある。

関数

一次関数について、表、式、グラフを関連付けて変化や対応の様子を捉える活動を充実させていく必要がある。また、表、式、グラフをどのように用いたらよいかを数学的に説明する活動も必要である。

○事象に即して、グラフから必要な情報を読み取ることができる。

●一次関数について、変化の割合を基に、 x の増加量に対する y の増加量を求めることができる。

●事象を解釈し、問題解決の方法を数学的に説明することができる。

データの活用

データを読み取るときに、数学的な表現を用いて説明するのが苦手な生徒が多い。予想から意見が分かれるような事象を取り上げ、確率を求めて判断する活動を取り入れることが必要である。この活動を通して、判断の理由を確率を用いて説明する活動も必要である。

○必ず起こる事柄の確率について理解することができる。

●不確定な事象の起こりやすさの傾向を捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明することができる。

理 科

○成果があった点 ●課題がある点

IRT スコアの分布図より、IRT バンド「1」の分布が全国平均と比較して高い。この原因として、生徒が情報を正しく読み取ることにより多くの課題を抱えており、問題を日常生活と関連付けて考察することが難しかったと考えられる。生徒質問の調査結果より、本校の生徒は「理科の学力」に対して、「理科に関する意識」の値が低い。授業の中で、科学的思考の先に新しい発見があることや実生活に理科の知識が活かされている感覚を養い、学習意欲を高める必要がある。ICT の活用頻度と調査結果の相関が確認されたため、ICT の活用頻度を上げることで、学習意欲を高める。

全体として、基礎知識及び技能は習得できているが、科学的な探求を通してまとめたものを発表する力や、見通しをもった実験計画を行う力に課題がある。また、探究から生じた新たな疑問と身近な生活との関連した着目した振り返りを行い、自らの考えを言語化することが苦手である。

「エネルギー」

指導に当たっては、基礎の定着に重点を置いてきたため、回路の電流・電圧・抵抗に関する知識は習得できている。しかし、変える条件（変数）に着目して実験計画を立て、結果の予想を行うことに課題がある。グループ活動を通して「観察、実験の結果から何が分かればよいのか」を共有し、探究活動の見通しをもたせる必要がある。探究の課題を自分の言葉で表現する学習場面を設定したい。

○回路の電流・電圧・抵抗や熱量の関係について理解している

●見通しをもった実験計画を行う

●適切な文章記述を行う

「粒子」

基本的な知識は習得できているが、実験の考察や振り返りを行うことが苦手である。実験の振り返りを行う場面において、「エネルギー」、「粒子」、「生命」、「地球」の領域を横断して多面的、総合的に捉え、思考することが大切である。

○元素を化学式で表現できる

●化学変化を質的・実体的な視点でとらえる

●探究から生じた新たな疑問や身近な生活との関連などに着目した振り返りを表現する

「生命」

生物分野の観察実験等で実物に触れる機会が少なく、動画や画像での紹介に留まっている。授業内で疑問に感じたことをグループ内で共有し、解決させ、様々な生物に関して考察を広げられるような学習場面を設定したい。また、生徒の実感を伴った理解を図る必要があり、稲美町の地域教材の活用や地域の高校や大学と連携した授業を行うことも検討したい。

●自ら疑問に思った事を解決できる

●実体験を伴った活動を行う

「地球」

大気圧の差によって生じる自然現象には様々な種類があるが、その違いを説明することに課題がある。地層の問題では、小学校で学習した知識及び技能を関連付けて、水の動きを具体的にイメージする力を高めたい。地球の分野では空間的な視点で空気や水の動きをとらえる場面を設定する必要がある。

- 大気圧に関する知識を身近な現象として認識する
- イメージを具体化させ、空間的な視点でとらえる

<児童（生徒）質問用紙>

高い項目

「毎日、朝食を食べている」「毎日、同じくらいの時刻に起きていますか」「毎日、同じくらいの時刻に寝ていますか」は全国・兵庫の平均より上であることから、家庭での基本的な生活習慣は身につけていると考えられる。

また、「将来の夢や目標を持っていますか」「人が困っているときは進んで助けますか。」「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」「友達関係に満足していますか」「普段の生活の中で、幸せな気持ちになることはどれくらいありますか」という項目が高く、全職員で肯定的な声かけ、教師がモデルとしての行動、認めるほめる教育を推進してきたことが、意欲的に学校生活を送り、生徒の自己肯定感や自己有用感の高まりとして表れてきていると思われる。

「地域の大人に、授業や放課後などで勉強やスポーツ、体験活動に関わってもらったり、一緒に遊んでももらったりすることがありますか」は、非常に高い割合を示している。本校で取り組んでいる稲美町ささえ隊としてのボランティア活動やコミュニティ・スクールの活動を通して、地域の大人への安心感・信頼感や郷土愛が芽生えてきている結果と考えられる。

「授業で学んだことを、次の学習や実生活に結びつけて考えたり、生かしたりすることができると思っていますか」「先生は、授業やテストで間違えたところや、理解していないところについて、分かるまで教えてくれる」の項目も高くなっている。「なぜ学ぶのか」を常に意識づけること、生徒一人ひとりに丁寧に関わってきた成果であると考えられる。

やや低い項目

平日の学校の授業以外の勉強時間や、土日など休日の勉強時間が少なくなっている。家庭での学習課題に関しては、現在取り組んでいることをより推進し、自主性を大切にすること、生徒に合った課題の量、難易度を調整することなど家庭学習の目標を細分化し、「できた」と実感できるように工夫していく必要がある。

(28) の ICT 機器の活用に関する項目では、まだ十分に活用できていないことがうかがえるため、今後さらに工夫していくことが必要である。授業の中で、目的を意識した活用や、家庭学習に取り入れるなど活用場面を増やし日常化することが大切である。

「自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していましたか」「各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていましたか」の項目が低くなっている。言語活動を各教科の授業の中で適切に位置づけ、生徒の実態や学習内容を踏まえた上で、一斉学習やグループ学習、ペア学習等の学習形態を計画的に取り入れるなど、「主体的・対話的で深い学び」の視点にたった授業改善を行っていかなければならない。

全体

授業においては、タブレットなどの ICT 機器の活用が不十分である結果から、各教科等における ICT 機器の活用の在り方を明らかにし、ICT 機器を活用した授業展開を工夫していくことで、全ての生徒が学ぶ意義や楽しさを実感できる授業を展開していく必要がある。

「道徳の授業では、自分の考えを深めたり、学習やグループで話し合ったりする活動に取り組んでいますか」では肯定的な回答をした生徒の割合が低い。教材との出会い、仲間の考えとの出会い、自分自身の考えとの出会いを大切にし、価値の押しつけではない心に響く道徳授業の実践にさらに努める。そのために、考えたくなる発問や議論したくなるような教材を用い、新しい気づきや学びのある時間になるよう工夫していかなければならない。

「学校に行くのは楽しいと思いますか」「友達関係に満足していますか」が高い割合を示していることに甘えず、今後も積極的に改革を行っていく必要がある。